

① 取組開始までの経緯

◆教務部長として

取組以前の本校は「国数英の基礎学力の充実」を教育課程編成方針の1つに掲げ、各教科及び学年で基礎学力の定着を目指した取組を実施していた。取組を継続していくうち実施内容が少しずつ変容したことで、内容の系統性が低くなり、期待するほどの効果をあげられなくなっていた。

そこで、本校における「学び」のサイクル作りとして、2つの学び直し（①義務教育段階の学び直し、②高校範囲の学び直し）を各教科で検討するように教育課程委員会で提案し、教育課程に学び直し科目を位置付けた再編を行った。

◆教科主任として

道教委の北海道高等学校学力向上事業（のちに実践事業へ名称変更）の学力テスト及び本校で導入している業者テストの結果を用いて、本校生徒の学力分析とつまずき箇所の洗い出しを行った。分析結果を英語科教員で共有し、本校生徒の英語力向上のために学び直しが必要であると共通理解を得た上で、「コミュニケーション英語基礎」を設定した。

② 取組を通じて、達成したこと

◆学校全体として

本校の教育の柱として、「学び直しとキャリア教育」という指針を明確に打ち出したことにより、教員個々の目標も定めやすくなった。学力テストの結果や学習状況実態調査のアンケート結果からも、その効果を十分に見て取れるようになった。

また、取組は国語・数学・英語の3教科を中心に進めてきたが、他教科でも関連性が高い分野は連携して指導内容を考えるようになった。

◆教科として

コミュニケーション英語基礎は、ペアやグループでのやり取りや教え合いをイメージしながら、年間を通じて活用する共通のハンドアウト（3パターン 12枚）を担当教員たちと作成した。これにより、実際に教科指導がスタートしてからも、担当教員の指導方法に差が出ることがなく、全員でALTとのTTを行うことができた。

また、ハンドアウトの作成にあたっては、英語科で中学校の学習指導要領を読み込んだ。その結果、中学校の学習内容と高校の学習内容の関連性や、本校で到達してほしい学習ラインを英語科全員で考えることができた。

③ 取組を進める上で、日頃から心がけていること

指導のシステム（指導計画や授業案、共通ハンドアウト等）を考案する際、必ず縦・横・斜めのつながりを重視するようにしている。縦は「学年ごとの到達目標や年間指導計画との関連性」、横は「同学年担当者の指導のしやすさ」、斜めは「他教科の指導内容との関連性」である。

教員一人ですべての生徒を指導できるわけではなく、また個々の生徒の全側面を見ることもできない。したがって、教員全員がチームとなって、入学から卒業まで指導にあたることができるよう、指導のシステムは誰にでも理解ができ、活用できるものにする必要がある。

④ 今後の取組について

学び直しや協働学習は本校で十分に根付き、自らの指導に活用する教員が増えている。また、数々の調査を重ね、本校教育活動の妥当性や適切さの検証を行うためのエビデンスは十分に揃いつつある。

次期学習指導要領では、教育課程で「社会との繋がり」が求められている。その一側面である生徒の進路希望は実に多様である。学び直しと高校の学習範囲とのリンク方法や、主体的・対話的で深い学びを用いた学習指導に改善を重ね、高校と社会をより一層円滑に繋げていくことで、本道の教育活動に寄与していきたい。